昭和文学全集

22

中村真一郎

井上光晴

開高健

北杜夫

三浦朱門

小学館

昭和文学全集

22

中村真一郎

井上光晴

開高健

北杜夫

三浦朱門

小学館

昭和文学全集
第22巻

昭和六三年七月一日　初版第一刷発行

著者——中村真一郎　井上光晴　開高健
北杜夫　三浦朱門

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一—〇〇一 東京都千代田区一ッ橋二丁目三番一号
振替 東京八—二〇〇番
電話 編集・〇三—二二九—四三五一
業務・〇三—二二三〇—五三二二
販売・〇三—二二三〇—五七三九

印刷——大日本印刷株式会社
製本——大日本印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価＝4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568022-9
©SHINICHIRO NAKAMURA　MITSUHARU INOUE　TAKESHI KAIKO
MORIO KITA　SHUMON MIURA　1988

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

中村真一郎 5

7 雲のゆき来
——或いは「うまく作られた不幸」——

100 孤独

171 頼山陽とその時代より 第一部

井上光晴 225

227 ガダルカナル戦詩集

253 地の群れ

320 階級

388 明日（あした）——一九四五年八月八日・長崎——

開高健 449

451 パニック

477 輝ける闇

589 ロマネ・コンティ・一九三五年

606 玉、砕ける

613 戦場の博物誌

北杜夫 647
649 幽霊――或る幼年と青春の物語――
741 夜と霧の隅で
794 岩尾根にて
802 羽蟻のいる丘
808 不倫
814 河口にて
822 死
835 おたまじゃくし
839 黄いろい船
852 まっくらけのけ

三浦朱門 859
861 冥府山水図
870 箱庭
960 先祖代々
983 武蔵野インディアン
1006 解剖

1033 作家アルバム

解説
1041 中村真一郎……池澤夏樹
1047 井上光晴……井上光晴
1053 開高健……開高健

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

1059　北杜夫……奥野健男
1065　三浦朱門……阪田寛夫
年譜
1071　中村真一郎……小久保実
1076　井上光晴……井上光晴
1081　開高健……浦西和彦
1086　北杜夫……斎藤国夫
1091　三浦朱門……三浦朱門
1096　底本について
1097　用字用語について

中村真一郎

雲のゆき来

――或いは「うまく作られた不幸」――

とふ人も訪はでほどふる五月雨に
雲はゆききのたゆる間もなき　　元政

人生在世如雲耳　雲去雲来雲本無
　　袁枚

Mind like a floating wide cloud,
　　Ezra POUND

一、発端――今年の春――昔の桜、昔の嬖妾の墓――幸福について

・今年の春は遅かった。

わが家の猫どもも春を待ちかねてか、稀に暖かい日射しが訪れると急いで縁側に出て昼寝をし、忽ち気温の下るために、次つぎと風邪をひいて、医者通いをしたり入院したりの繰り返しだった。私も書斎のストーヴを片附けたと思うと、また、取り出して埃臭い火に掌をあぶっていた。

そうした或る日、例の桜が花を持ったという知らせを受けて、直ぐ私は出掛けていった。

私の家から二三分のところに有名な豪徳寺の赤門がある。江戸時代には朱塗りの門を作るのは、建主の勝手にはできなかった。幕府の許可のもとに建てられるので、それは高い格式の象徴であった。本郷東大の赤門は、前田家加賀百万石の屋敷のためのものであったし、豪徳寺は井伊家彦根三十万石の菩提寺であった。

豪徳寺の赤門は山門ではなく、庫裡に近い裏門である。もう朱も剝げかかった、落書きだらけの門を潜って、十年前までは池のあった跡を左手に見ながら寺内へ入って行くと、大きな仏殿にぶつかる。その前に、私が今、「例の」といった桜の樹が、柵に囲われ副木を当てられて、のけぞりながら辛うじて立っている。

それは非常に古い桜の樹である。どれくらい古いかと云うことは、大学頭林述斎が幕命によって編纂した『新編武蔵国風土記稿』という地誌のなかの記事によって知ることができる。

林祭酒は文化七年（一八一〇年）に昌平坂学問所内に地理局を設け、自ら総裁となって編纂の業をすすめた。一応完成したのが文政九年、更に訂正浄書されて、幕府に提上されたのは天保元年（一八三〇年）、前後二十年に亘る大事業であった。幕府の官撰であるから、記述の内容は正確で権威があるものと思われるが、その巻之四十八荏原郡之十世田ヶ

谷村の「寺院」の部、豪徳寺の項に、この桜のことが載っている。

当時の豪徳寺は、風土記稿の記事によっても、また、古い絵図によっても、今日よりは大分大きな規模を持っていたことが判る。昔、寺内には「十景」というものがあった。恐らく寛永十五年（一六三八年）に井伊家がこの寺の大檀那となって、「殿舎堂閣ノ修理等モ加」えた際に、その十景も定められたのだろう。

その十景は、しかし寛永から天保に至る二百年のあいだに、指定された建物も亡び、地形も変ったりしたのだろう。風土記稿を撰するに際しての調査では、正確な場所の判らなくなっていたものもあった。

が、私が毎年の例として見物に行く「例の桜」は当時も健在だった。

十景の第四、臥竜桜、「境内仏殿ノ前ニアル桜ナリ。一名ヲ御所桜トイフ。相伝フ吉良家サカンナリシ時、書院ニアリシ木ナリト云。」

このあたり、世田谷近辺は、徳川氏が関東に入って重臣の井伊氏が領有するまでは、小田原北条氏の一族である吉良家の支配下にあった。現に豪徳寺の隣りには今も、吉良家の城趾が残っている。もっとも城と云っても、本来は足利将軍家と縁続きであり将軍職の継承権をも主張する資格のあった吉良家の築いたのは、戦国大名の実戦用に作った山城ではなく、貴族的な邸だった。それは城であるより「御所」と呼ばれるに適わしいもので、現にその邸も、また邸の主も、そう呼ばれていた。

また豪徳寺そのものも、元来は吉良氏の一夫人のために建てられたもので、その夫人の院号によって弘徳院と名付けられていた。文明十二年草創というから、十五世紀の末である。それが井伊掃部頭直孝が吉良家に代ってこの地の領主となるに及んで、寺は面目を一新し、直孝は「中興ノ開基」と讃えられた。その直孝の卒するに及んで、法号の久昌院殿豪徳天英居士に因んで、寺名も豪徳寺と改められたわけである。（もっとも土地の人たちにとっては、室町風のインという呼び方がジという江戸風に変ったというだけのことであったかも知れない。弘徳、豪徳、耳で聞けばどちらもコウトクである。）

そうしたわけでこの臥竜桜、一名、御所桜は、初めからここに植えられていたか、そうでなくともここから百米もない城趾のどこかから移植したものだろう。そうして、この樹が初めて花をつけたのは、晩くも十六世紀だったと云うことになる。

そのような古い樹は、幕府の地理局の官吏が十九世紀のはじめに調査した頃には、すでに、「此樹ハ尤古木ニシテ、ソノ枝葉ノヒロガリシコト、南北ヘ凡廿間余、東西ヘ十四間アマリナリ。木ノサマ前後左右ヘ枝サシ出テ、ソノフリヨキ木ナリ。此桜カク古木ナレバ、幹ノ内ニ深ク枯入タル所アリテ、ヨホドノ穴トナレリ。」という有様だった。

風土記稿の編纂後、今日までにまたもや百数十年の時間が経過した。そうして、この桜の樹は天正、明治の二度の政体の改革をも知らぬげに、毎年、春の訪れと共に相変らず五百年前と同じ色の花を、その梢のさきに開くのである。

もっとも百五十年前に東西南北に枝を拡げて「臥竜」と名付けられた面影は、さすがに今日では失われている。幹のなかの空洞は——伝説ではそこに大きな蛇が棲んでいたことになっているのだが——今ではいよいよ拡がって、陽の光のなかにその内部を露出し、光線を嫌うどのような動物も、そこに潜むということはできなくなっている。いや、材木に支えられて立っているのは、幹というより最早、単なる木の皮の筒である。そして、その筒の先端に細い若枝が何本か辛うじて延びていて、そこに可憐な花がおずおずとほほえむ。

その花は毎年、これが最後かも知れない、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

もう地下の根から、この老衰した幹は樹液を吸い上げる力を来年はなくしてしまうかも知れない、夜半の嵐は花を散らすだけでなく、名ばかりとなった木皮細工のような幹そのものを打ち倒してしまうかも知れない、と危懼しながら、微かな風にも身を顫わせているように見える。

が、そうした不安にもかかわらず、――その不安はこの老木のものか、それを見守る私のものか、もう年々のことで判らなくなってしまっているが――春が確実に巡ってくるのと同じように、この樹も最後の力を振りしぼって、そうして今年の長い冬にも耐え抜いて、またもや優美な花を開いた。王朝風の御所の中庭に、雅びやかな北の方の慈愛の眼差しに見守られながら育ったその若枝は、ひと度、濛々たる戦塵が小田原街道を覆った後は、今度は新興都市の江戸から三里の田圃道を、馬を駆ってやってくる徳川武士たちに、武蔵野の春の風雅を教えるようになった。それから更に舞台が廻って、もうすっかり都会人化していた徳川氏の一門を薩長の軍隊が江戸から追った後には、維新革命のイデオローグの最良のひとりであった吉田松陰が、この近くに祠られることになった。そうしてこの新しく出来た神社へ参詣した新政府の大官たちは、ついでにここまで足を延して、この古い大樹に新たな我が世の春を感じたことだろう。が、彼等の作った新しい国家も百年たらずで破産してしまった。そしてその瓦壊の嵐のなかで遠く海外の各地に、若い生命を捲き散らしてしまった青年たちの魂が、今度はここへ帰ってきて憩うこととなった。今は埋めたてられてしまった池の畔りには、戦歿学生記念碑が立てられた。私と同世代の青年たちは、一九四〇年頃からもう年をとることはやめて、この記念碑のなかから、永遠に若い眼差しで、いつまでもこの桜の花をみつめているのだ。……

だから、私は春毎に、この老樹の下に立って花を見上げる時、私の心に云い知れない複雑な微かな音が湧き上ってくるのを感じないではいられない。私の心のなかでは、五百年の間にこの花に托した無数の人々の思いが、一斉にまた語りはじめるのだ。彼等の甦りと共に、彼等を包んでいた物音がやはり一斉に眼覚めるのだ。

が、今、戦歿学生の碑の前を本塁にして、野球に興じている小学生たちは、ここら一帯を焼き払った戦禍の記憶さえも、全然、持ち合わせていない新しい世代である。

私は時期を過ぎても未だ北方へ去って行こうとしない、今年の寒い風のなかで、暫くの間、この御所桜の花を見上げていた。繊細な花弁を浮き上らせている薄青い空の奥には、どこかしら春の先触れのようなものがたゆたっているように見えた。

その風情が私の意識の底で連想を呼んだのだろう、私はいつの間にか、ゆっくりと石畳を踏んで、寺の奥にある墓地の方へ向っていた。何となく騒がしい、どこかの新聞社の人たちが、桜の木の柵のそばに社旗を翻した自動車を停め、カメラマンと一緒に降りてきて、この珍らしい桜を取材しようとしはじめたことが、私をそこから移動させることにもなったのだった。

石畳は一直線に延びて、長い石垣の区切る一劃のなかへ私を導いて行く。

そこは維新前のこの寺の「大檀那」であった彦根侯井伊家の歴代の墓所である。だから、勿論、万延元年に桜田門外に倒れた大老井伊直弼の墓も、背後に殉難八士の碑を従えるようにして立っている。さすがは封建の世の秩序と前例との支配する世界のなかで建てられたのだから、歴代の大守の墓は設計も大きさも寸分異わぬように作られていて、碑面の文字もどれもこれも殆んど同じ××院殿従四位下前羽林中将××大居士と云うようなものである。治世が平和だった人も、また変転のなかに生きた人も、幕府の形式的な官僚組織のなかでは大体同じ官位に陞って終ってい

るのである。

私はそれらの先の世の大守たちの墓石の列りをひとわたり眺めやったあとで、以前から見当をつけていた或る墓のまえに歩みよった。

あの御所桜の優美で可憐な花が私の意識の底で連想を呼んだと、先程、述べたのは、この墓の主のことである。私は去年から何度も、この墓地へ来てこの墓を展しようと思いつき、そのたびに億劫な気持が先に立って諦めていたのだったが、今日、桜にうながされて寺内に入ったのは、この墓を訪れるのに最も自然でまた心の用意もそれに適しい機会だと感じたのだった。

その墓には、正面に春光院殿華岑担月大姉と刻まれている。そして右へ廻ってみると、右側面には延宝九辛酉、ひと廻りして左側面を見ると、正月初八日としてある。墓の大きさも形も歴代の大守のそれと一致している。

春光院は即ち、初代の彦根藩主井伊直孝の側室である。（彼女は延宝九年正月八日に歿したわけである。）しかし、嬖妾の墓がそのように主人と同じ規模で作られたのは、彼女の生んだ子が二代藩主直澄となったからである。

彼女は時の大老の生母であった。そうして彼女の兄は彦根藩の大夫となり、三千石を領した。またその妹は尾張六十万石の御国奉行川澄氏の正妻であった。

彼女の一家は繁栄した。彼女自身、江戸の彦根藩邸に住んで、幕府に権勢並びなき大老の寵愛を一身に受けながら、十七世紀の上昇期の江戸文明を享受していた。しかも後半生は藩主の母として、深い尊敬に取りまかれて平和な日々を過したはずである。わが子の直澄が三十万石の家督を相続した翌月には、遥ばる老母を京都から呼び寄せて、藩邸内に起居を共にすることもできた。

私はこのような稀な幸運の生涯を過した女性のことを想像するだけで、私自身の心までが暖まるような気がした。私たちの一生というものは、仲々、このようにうまく行くものではない。しかし、様々の先天後天の要素の協力によって巧妙に作りあげられた一人の人間の幸運な生涯を眺めるのは、芸術家の霊感と細心な技術との共力によって作りだされた傑作を見るのと同じ感動を、私たちの胸に喚び起さずにはいないだろう。

様々の後天的先天的な要素のうちには、貴族的な小田原北条家に仕えた彼女の祖先の血もあっただろう。また、後に当代一流の宗教家文学者を育てることとなった、教養と信仰心との豊かな家庭の環境もあったことだろう。更には三十万石の大名をして寵愛措くあたわざらしめた、性格の美しさと、そして何よりも美貌とがあっただろう。

美貌については、彼女の弟がやはり一世の美男子であったことが、当時江戸中を湧かせた恋愛事件の主人公であることによって証明されているのだから、その姉の麗質についても、凡その想像はできるのである。……

（と、ここまで書いてきて、作者は随分、廻り道をしはじめていると云うことに気が付いた。そうしてその廻り道は近くの途中に本筋へ曲る間道もありそうに見えない。――私が御所桜を見物に出掛けたのは、ほんの気紛れであった。その気紛れが春光院の墓まで私の足を延ばさせた。そして私は「幸福」というものについて、暫く思いを遊ばせた。私の心の奥の方で、その「うまく作られた幸福」という観念の裏返しに、「うまく作られた不幸」という観念が、芽生えはじめていた、と云うことに気付いたのは、それから数日してだった。そして、そのことを意識しはじめた私は、この物語が私のなかに、いつの間にか出来上っていることも同時に自覚したのだった。――私はそこで「うまく作られた不幸」の体現者である現代の一女性について、語るつもりになったが、そうするにはその物語が私の心の裏側で自然と形をとって行った順序に従って、それを語って行きたいと思った。それがこの廻り道となったのであり、そして

その廻り道は、当分、続くだろう。私は読者にもその廻り道を愉しんでもらいたいと思う。）

二、心理的秩序――『草山絶句』――詩的体験

さて、相変らず廻り道を続けるとなると、今度はあの幸運な貴女春光院の弟の、不運な恋愛事件について語るという順序になる。

が、ここでもまた私は、急ぎたがる私の気持を制して、まず、その主役である「春光院の弟」なる人物と、私とがどのようにして出会ったか、そのそもなれそめから、ゆっくりと話を解きほぐして行きたいのだ。この物語は、あくまで「時間的秩序」でない、「心理的秩序」に従って展開させて行くつもりなのだから。

春光院の弟、そうして青春時代には江戸の噂の中心人物となるほどの艶名を売り、やがて京都の郊外に隠棲して、僧侶としても文筆家としても、一代の名声を担うに至った人物。それは、俗名石井俊平、兄と同じく彦根藩の家臣であり、出家してからは法名日政、字の元政によって世に知られている日蓮宗の上人である。

私がこの上人の生涯や仕事に興味を持つに至ったのは、やはり偶然であった。――

私は少年時代から、読書ということが殆んど唯一の趣味、道楽となっている。世間の人は文学者の趣味が読書だと云うのは、銀行員の道楽が算盤だと云うのと同じように、笑止なことだと受け取るようだ。

しかし、文学者は成程、仕事の必要上、他の職業の人々よりも、書物に接する機会は多いだろう。しかし、彼等の仕事は、（念を押しておけば）本を作る方なのであって、読む方ではない。文学者必ずしも多読家ではなく、時には他人の作品は一切、潔癖にも遠ざけて手にしない、と云う作家もある。（一体に、我国近代の文壇の風潮は、作品に書巻の気のあることを嫌う。碌に本を読んだことのない青年作家さえ、批評家からその作品が「ブッキッシュ」だと非難されることを、致命的な断罪として恐れ慄えているのである。現に最近も、ある若い文学者がアンドレ・ジードの文章を引用したばかりに「ペダントリー」の咎によって、貝殻追放に遭いそうになった。ペダントリーと云うのは、専門家さえも知らないような作家のものを引用することだとばかり信じていた私は、そこから深刻な教訓を受けた。――が、私はすでに教訓を受け入れるには遅すぎる。四十年間の習慣を、今、遽かに改めようとしても、神経衰弱になるくらいが落ちである。）

そういうわけで、私は仕事の材料としてでなく、古今東西のあれこれの本を気紛れに手にし、飽きたら頁を閉じて忘れてしまうという浮気な読書を、長年、断続的に続けている。そうした習慣の命じるままに、昨年のはじめの或日、私は『草山絶句』という古い本を開いた。

これは序言もなければ出版の年代も記してない、その上、いきなり巻三上から始まると云う端本である。しかも、編集が粗雑で、同じ詩が重複して出て来ることもあった。

しかし、この一冊のと云っていいかどうかも判らないような、中途半端な書物が、私を一気に江戸初期の一僧侶の精神の真中へ惹き入れてくれることになった。

『草山絶句』の著者が元政上人なのである。それまでは私にとって、この坊さんは単なる名前に過ぎなかった。それも少年時代に芥川龍之介の全集によってこの名を教えられた時は、むしろ軽蔑すべき風流人、生命力の微弱であるという消極的な美点によって娑婆苦を脱することのできた、人生の大いなる苦悩も歓喜も知らなかった人物として、私のなかに記憶された。もっとも芥川の断定は屢々その切味の鮮かさをねらう余りに、大事なところ

を切り落してしまう危険があると云うことも、後年の私には判ってきたので、この一刀のもとに切り捨てられた上人も、案外、面白い人物なのではないかという反動的な疑惑も、後になって心の底に低迷しはじめてはいた。

しかし実際に、私がはじめて、彼の書いたものを目の下に開いたのは、名前を知ってから殆んど三十年の後であった。

そうして、彼のどれもこれも似たような詩句を、次つぎと読み進めているあいだに、私はいつのまにか、単純で自由な不思議に快い世界へ、自分の心が運ばれて行っているのに気がついた。それは確かに「詩的体験」だった。——

一体に、近代日本の批評家たちは、文学作品のなかに、直ちに作者の面影を発見することを喜ぶ。（作品の背後にではない。）従って、告白的な作品が最も批評家たちを喜ばせる。いわゆる虚構を用いて発明された物語に対しては、実感に乏しいという非難が飛びがちである。だから、今日では実感という言葉は作者自身の個人的な体験の露骨な表白が、読者の心のなかに惹きおこす恐怖感を意味するようにさえなっている。

しかし、私が『草山絶句』のなかに、詩的体験を味ったというのは、その詩集が作者元政上人の生活の記録であったからではない。またその詩句が作者の性格なり気質なりを如実に表現していて、馨咳に接する想いをさせてくれたからではない。

私は告白的文章を読む場合でも、最初に注目するのはその文章の語っている人物そのものの個人的な運命ではなく、その文章の表現の或る独特の味、色、匂いがそこに作りだしている、日常生活とは別の秩序の支配する世界である。いわんや詩的作品においてをや。

詩的体験とは言葉の響きと映像との調和が読者の心のなかへ生まれさせるひとつの夢だろう。そうして元政上人は三世紀後の一文士の或る夜の心のなかに、確実に言語によって別世界を開いてくれたのだ。

私はいつまでも続くクラヴサンの曲を聴くような想いで、幾分、単調なそうして似たような詩句のうえに眼を走らせていて、充分幸福だった。

『アンナ・カレニナ』の有名な書き出し以来、作家たるものは人間の幸福ではなく不幸の方に関心を集中することが流行となっている。それは人間性の善ではなく悪に、また美ではなく醜に、真実を発見しようという傾向とも歩調を合せている。醜こそ美であるという逆説の証明に全精力を尽した果に気が狂ったり神の前へ膝を屈したりしたのが、自然主義の諸作家だった。

私もまた、この「うまく作られた不幸」の物語を発想した根底には、そうした傾向への共感があったはずである。

しかし、その物語が私の心のなかへ発芽した状態を、なるべく忠実に辿って行こうとして、私は成り行き上、どうしても私の心が捉えられた幸福感、『草山絶句』によって或る冬の夜に、私が遊んだ別世界の趣きを、筆にしなければならなくなった。

それは余りやさしくはない仕事である。私はもう一度、一年振りにその古ぼけた詩集を書棚から下ろして、開いてみた。特にすぐれた詩篇を、二つ三つ、ここに書き写してみせれば、読者に私の幸福感が伝わるかも知れないと思ったからである。ところが案外なことに、私の手で朱点の打たれている句を、今、改めて眺め直してみると、たとえば「深山未ダ是レ人ノ声ヲ聴カズ」にしても、「旅客流レヲ飲ンデ秋満腹」にしても、「満林ノ花ハ一枝ノ中ニ在リ」にしても、「卻ツテ長安一日ノ花ニ坐ス」にしても、別に極だって表現の妙を尽しているわけではない。

『悪の華』を読んで、女の心を「輝かしい秋の、あるいは沈み行く陽の優しさ」に喩えた句に遭遇した時のような、あるいは『プルフロックの恋歌』を開いて、夕暮が「手術台で

エーテルを嗅がされた患者のように」伸び拡がるという表現に出会った時のような、突然に心のなかの秩序が組み変えられる感覚――万華鏡を僅かに回転させると全く異った図柄が現れ出て、その時に受ける、意識のなかの新しい面に突然に光りが投げかけられたという驚きのようなもの――は、それらの元政の句にはない。

それならばどういう種類の詩的体験なのだろうか。一句ずつを引き出したのではむしろ、平明で目立たないような表現が静かに次つぎと眼の下を流れ過ぎて行く間に、そのたゆまぬ囁くような響きが、心を優しく慰めてくれる、そういう喜び、とでも云ったら、幾分か私の体験の性質を伝えることになるかも知れない。そして、その響きには独特の山林の気のようなものがあり、人気のない谷間の道を、遠い陽に照らされながら、どこまでも同じような風景の続くなかを歩いているのに似た快感と云ったら、更に私の感動の性質に近付くような気がする。

そして、それは奇抜な表現による、衝撃的な別世界の啓示ではないけれども、それでも確かに私たちの心を、この塵界から一時、別乾坤に移してくれるものである。そのためには、思いきった新しい比喩のようなものは、却って必要がないとも云える。

そう思いきめて、改めて『草山絶句』を読み直してみると、私が今述べたような状態に人を導いてくれるのは、いわばどの句でも同じだと云う気がしてくる。どの句をここに写しても、私の云いたいことが通じれば通じるし、通じなければ諦めるより仕方ないだろう。

たとえば、「偶作」

水月橋辺水月秋　水光月色共悠々
我心如水還如月　月落水流流不流

水月橋のほとりの水に映っている月、その月影に漂う秋、その秋のなかで、水の光と月の色との調和が悠々たる世界を作り出している。私の心はその水にも似ているし、また月にも似ている。月は水の流れに影を落していて、その影は流れている、いや、流れていない。――この旋回的な情緒……

三、異国の兄弟――性霊と模擬――
比較文学的発見――ポエマ・エロチカ

『草山絶句』にいい気持にされた後で、私の精神からは仲なかその陶酔が退いて行かなかった。

そうしてその酔い心地の続いているなかで、こうしたことを考えた。――それはこの詩集の作られた十七世紀には、多くの漢詩人たちがいたけれども、そうして私はそれらの詩人の詩集を今までに何冊か読んだけれども、一度もこのような快感に導かれたことがなかった、と云うことだった。

藤原惺窩も、林羅山も、伊藤仁斎も、彼等の詩は私には、中国の伝統的な詩語が、ただ詩のような振りをして列んでいる、厖大な詩の形骸に過ぎないとしか感じられなかった。元政と共に「寛文ノ詩豪」と併称された石川丈山の『覆醬集』でさえ、私には何の詩的感動をも惹き起さなかった。

私はそうした私の体験からして、直ちに十七世紀の漢詩は下らない、と断定しようとは思わない。それほどの学識は私にはないからであり、彼等の詩の理解には、五山文学への傾倒が素養として要求せられるだろうからである。

しかし、不味いものは甘くないように、判らないものは感心するわけに行かない。私は彼等の仕事が、少くとも現在の私には閉された世界だとして、以前から諦めていた。

ところが、ここに元政上人の詩だけが、あの時代の凝固した詩の堆積のあいだから、清冽な水のように私に向って流れ出し、そうして私の心に新鮮な水しぶきを注せかけてくれたと云うことになると、一体、上人の詩は同時代の他の諸々の詩人とは、どう異っている

のか、またその理由は何か、と云う疑問が私のなかに生まれてきたのは当然である。

どうもそれは単に上人の表現が平易で、素人向きだから、と云うようなことではないに違いない。

そうした疑問が、時々、私の頭の隅に顔を出したり、また、消えたりを繰り返している間に、元政のものをと頼んでおいた古書肆から『元元唱和集』が、まず届いた。

私は早速、その頁を開いた。そして、忽ち次のような句が眼に入った。それは「李梁谿ガ酒ヲ戒ムル詩ヲ和ス」という五言古詩の序のなかであった。

「蓋シ性霊ヨリ流ルル者ハ徳有ルノ言也。模擬ヨリ出ル者ハ必ズシモ徳有ラザルノ言也。性霊ヨリ流ルル者ハ或ハ整斉ナラズト雖モ痕ナシ。模擬ヨリ出ル者ハ是レ整斉ナルト雖モ未ダ必ズシモ痕ナクンバアラズ。」

私はこの文章のうちに、二度、繰り返して出てくる「性霊」という言葉に注目した。そして、それが二度とも「模擬」と云う言葉と対比されていることによって、私の心のなかに鋭い一条の光が投じられる想いがした。

『元元唱和集』の開巻第一頁の陳元贇の序のなかにもすでに「其ノ性霊ヲ発舒シ雅興ヲ暢適スル丁ヲ為スハ云々」という句があったが、その際は私は「性霊」という言葉を、人間の本性というような普通の意味にとって読み過した。しかし、今、元政自身によって、「性霊」が「模擬」と明瞭に対立させられて出てくると、私はもうそれを虚心には読み過せなくなって来た。

『元元唱和集』は元政上人と陳元贇との、つまり二人の元の字を名に冠している詩人の唱和の詩集である。元政がはじめて元贇に紹介された時、この明末の亡命者は極めて愛想よく、元政の名乗りを聞いて直ちに、「あなたは元政、私は元贇、それでは兄弟ですね。」と答えて、座の空気を和かにしたと云う話が、元政自身の筆によって伝えられている。（『身延山行記』）

恐らく、心細い異国の生活のなかで、貴顕の士に対しては喜ばれそうな言葉を注せることが習慣になっていたに違いない陳氏の軽い座興は、二人がそれから学芸を談じはじめるに及んで、単なるお世辞ではなくなった。お互いの趣味の一致は、忽ち年齢の差（元贇七十三歳、元政三十八歳）も国籍の異いも超越して、真に兄弟のような心の繋りを、二人の間に意識させるに至った。そうして、この年の終りにはもう、二人で唱和詩集を出版しようではないかと云う打ち合せの手紙が、京都と名古屋とを往復することになる。（元贇は当時、尾張初代の藩主義直に聘せられて、名古屋に住んでいた。だから、元政との出会いの場所も、上人の姉の嫁ぎ先の尾州藩御国奉行川澄氏の邸であった。）

私はこの二人の出会いの挿話を想い出すたびに、奇妙にこそばゆい想いを禁じ得ない。亡命者陳五官は当時の日本人に喜ばれると知って「兄弟」だと云った、その中華意識に、複雑な心理の屈折を感じるからである。元贇は当時の世界文化の中心から、辺境である日本へ来ていた。そして東海の孤島の知識人たちは実際に、中国のインテリから「兄弟」と呼ばれることに虚栄心をくすぐられたのだろう。――そうした日本人の劣等感に乗ずることを、この亡命者は長い経験で処世術として心得ていたのだろう。――この挿話は直ちにまた、私にもうひとつの別の挿話を連想させる。それはフランスの作家の集りに、イリヤ・エレンブルグを紹介する際に、ジュール・ロマンの不用意に発した言葉である。この中華意識の旺盛な、（だから、自分の筆名にローマ人ユリウスという皇帝まがいの大層な名をつけたのであろう）作家は、ラテン文明の辺境から亡命して来た野蛮人を暖かく迎えるために、「あなたは、もう半分、フランス人なのです」と述べた。そうして、それは敏感なエレンブルグのコンプレックスを刺戟した。彼は『西部戦線より』という、フラン

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com